来し方を振り返って
──山口先生にお聞きする──

それでは、インタビューを始めたいと思います。よろしくお願いいたします。2006年３月に山口先生が定年をお迎えになり、記念論集のなかにこのインタビューを掲載するということでお願いしております。インタビューは、法学部でこれまで共に教鞭を執ってきました竹治と松尾とでさせていただきます。山口先生は法学部はもとより全学的に留学生科目の教鞭を執ってこられましたが、ご所属が法学部ということもありまして、現在、記念論集の編集委員をさせていただいております私たち２人で進めさせていただきます。

今日はざっくばらんにいきたいと思いますが、まず、山口先生のご経歴を簡単にご紹介したいと思います。

山口先生は1940年11月に京都でお生まれになり、小学校、中学校、高等学校まで京都で過ごされました。その後、1962年に大阪外国語大学モンゴル語学科に進まれ、1966年に京都大学大学院言語学専攻課程に入られました。それから、1972年に大阪外国語大学の先生として赴任、1988年に立命館大学に赴任されました。立命館大学ではとくに留学生の日本語、言語教育情報研究科日本語教育学プログラム、その他全学的に言語学の授業などを担当されて今日に至っております。

それでは、生い立ちの辺りからお話をお聞きしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

京都で幼い頃を過ごされていますが、戦争中の思い出がおありでしたらお願いします。

山口

京都は幸いあまり戦禍がなかったですね。敗戦が1945年でその時４歳だ

から、少しは覚えています。父が外地、中国戦線に戦争に行って、途中でひどい病気になって白衣で戻ってきたことを覚えています。それから、植物園がありますよね。あそこは戦後はアメリカ軍に接収された。接収される前の植物園だった時に、私の家は今で言えば北山通りの辺り、新町北山一筋下がった西にありました。ですから、賀茂川が近くて、賀茂川を渡ればすぐ植物園。長い間行っていないのですが、今は洒落た通りになっていますね。昔は十二間道路と言っていました。父が京都の連隊に入っていて植物園に来たので、母親と会いに行ったことを覚えています。植物園に泊まっている父を訪ねて……。母は妹を背負って、私の手を引いて賀茂川を渡って……もちろんいまの橋はなかった。北山通りは十二間道路と言っていて、兵隊がその砂利道をザクザクとよく歩いていたような記憶がなぜか耳に残っています。

□　1962年に大学に入られていますが、少し歳を取られてから入学されたのですね。少し迂回されたのでしょうか。

山口

そうですね。一度諦めた大学に入るのに３年かかっています。私は1947年に小学校に入学しました。昨年退職された山本先生は私より１年上ですが、かなり状況が違うのですね。1942年から小学校が「国民学校」になりました。国民学校がまた「小学校」に変わったのが1947年。私が入った年はまた小学校に変わった年なのです。また新憲法施行の年でもあります。だから、いろいろなものが変わっていて、１年上の山本先生とは違うカリキュラムです。１つ上は数学でも解析や幾何だったのが、我々の時から数学Ⅰ、Ⅱになったのです。新しい憲法に則ってやったから新しい教育を受けたのですね。だから、「黒塗りの教科書」などは知らない世代です。

□　１年上までは昔の教育を引き継いでいたのが新しいものに変わった。いわゆる戦後の教育体制に変わったということですね。

山口

そうです。

□　新しい教育制度の最初の学年で、戦後教育の申し子のようなものですね。

山口

戦争による「没落家庭」（母はいつもそう言っていました）で家は結構大きかったので、下宿をやっていて、立命館、府立医大、同志社の学生など5,6人いました。その頃は楽しみと言ってもチャンバラごっこかターザンごっこくらいだったので、学生が持っている本をよく読んでいました。彼らは休みになると帰省するので、その間に彼らが持っている本を読んでいて、結構早熟な子どもだったのですね。

□　どんな本でしたか。

山口

『坊ちゃん』や石坂洋二郎の青春もの『青い山脈』とか、なぜか尾崎一雄の『暢気眼鏡』なども題名だけ覚えています。それが楽しみで、早く帰省してくれないかなと思っていました。兄もいたので、学生さんは私にも同じように話してくれて、彼らが話している内容から世の中の状況みたいなものを感じ取っていたような気がしますね。

　中学校の２年生の時だったか、ビキニ島の水爆実験があって第５福竜丸が被災するという事件がありました。これは私にとって最初の社会的

な出来事でショックを受けました。３年生の時にそれについての作文を書いたのです。かつて下宿していた人に広島出身の人がいて、原爆が落ちて死体がゴロゴロしていたところを歩いたという話を聞いていたので、そういう意識があったのかもしれません。この事件を非常な怒りをもって作文に書いたら、教師からすごく褒められたことを覚えています。

□　先生の高校時代にも世の中が動いていましたよね。

山口

いろいろな問題がありましたね。1959年に高校を卒業して、もはや戦後ではないと言われて高度成長期に入る直前みたいな感じでした。その時、兄が立命館に行っていたのですが、かなりの放蕩者でして……。（兄は2001年に亡くなりましたが）、そういう家庭問題があり、高校時代は世の中に対する反抗心のようなものがあって、後から考えると青年期によくある現象だと思うのですが、ニヒリスティックな気持ちにずっと陥っていたのですね。

□　まだ当時はみんながそれほど大学に行くという時代ではなかったですよね。

山口

団塊の世代の前ですが、そろそろ高校や大学の進学率が上向きになってきた頃です。大学を受けて落ちた後、今で言うフリーターですかね、田舎で生活したりしていました。家の問題もあったので精神的にしんどくて、母親が田舎ででも生活したらということもあって、田舎に引きこもったのです。そこで、小学校の子どもを教えたり、農作業を手伝ったりして、かなり快適でこのままこれでもいいかなと思ったのですが、しか

し、やはり７、８ヵ月経つと、ほんとにこれでいいのか……と思うようになって、また戻って来ました。滋賀県の南郷の辺りにいました。今はだいぶ拓けていますが、当時は田舎でした。帰って来て、アルバイトをしたり、本を読んだり、詩を書いたりしていました。

□　文学少年でもいらしたのですね。

山口

今から思うと、案外文学少年でもあったのですね。大学院に入ってからも生協の書評誌などに評論を書いてお金をもらったりしていました。

　それで、このままでもいいかなと思っていたのですが、やはり勉強をしないといけないかなと思い始めていました。その頃たまたま梅棹忠夫さんの『モゴール族探検記』を読んだのです。「モンゴル族」でなくて「モゴール族」です。岩波新書から1956年に出た本です。なぜかこれがピッタリきたのですね。モゴール族というのはジンギスカンの子孫が中央アジアからヨーロッパに行く時に、中央アジアにイル汗国というのを建てた。その子孫がアフガニスタンで、１万人くらいがずっと同族結婚をして、いくつかの村に分かれて住んでいて、モンゴル語も文字も残っている。ジンギスカンは知っていましたが、これはすごいと思ったのです。それで、たまたま大阪外大にモンゴル語学科があって……。いわゆる受験勉強はあまりしていなかったので、受験科目に理科がなくて、だから受けて入ったのですね。こじんまりした学科で15人くらいでした。

□　15人いたのですか。多いですよね。モンゴル語をやる人が15人というのは……。

山口

でも、中国語なんて１クラス60人もいましたから。モンゴル語、タイ語、ビルマ語とか少数民族語はそれぞれ15人程度でしたね。

□　入ってみられて、モンゴル語はおもしろかったですか。

山口

最初はそれほどでもなかったです。入学しても最初はあまり真剣に勉強しなかったですね。相変わらず本を読んだり、酒を飲んだり……。しかし、３年生くらいから勉強をし出したのですね。

1960年代という時代はすごい時代でしたね。安保の時は田舎に引っ込んでいましたが、1960年代というのは、高度成長期で、東京オリンピックもあったし、新幹線が走ったり、それ以上に、ベトナム戦争、文化大革命、後半には大学紛争もありましたよね。そういうことで目覚めたというわけではないのですが、勉強をし始めたのですね。モンゴル語もやり出すと、とてもおもしろいということがわかり始めてきたのです。

□　どのような点を、おもしろく思われたのですか。

山口

モンゴルと日本が本格的に外交関係を持つのは1972年からで、直接的情報が入りにくく、モンゴル語の本も本当に手に入りにくかったのですが、ナウカ書店からたまたま入るようになってきたのです。文学作品なども入ってきたりしました。モンゴル語は日本語と構造がよく似ているし、そんなに難しくはないのです。ジンギスカンは知っているけれど、1921年に革命が起こって、いわゆる人民共和国になって、それ以後はあまり知らなかった。抑留された人たちがシベリアやモンゴルで強制労働に従

事させられたことは断片的に知っていましたが……。

□　現代モンゴルについては一般にあまり知られていないですね。

山口

モンゴルという国は封建制から一挙に世界で２番目に社会主義革命を起こしたわけです。本も文学作品やマルクス、エンゲルスなどの社会主義的なもの、共産党宣言なども翻訳されているのです。それらを見た時ものすごく興味をひかれました。どういう語彙が使われているかということが……。例えば、インターナショナルな言葉はロシア語を通して入ってくるのですが、搾取とか資本とかいうことばはモンゴル語を使っているのです。搾取は骨を齧る。遊牧民ですから乳を搾るではなくて、骨を囓るなのです。資本は酵母。馬乳酒やチーズを作りますよね。その時に発酵させる酵母ですね。電話はテレホン・オタス。オタスは糸です。テレホン・オタスで電話。あとになってくると、テレホンが消えて、オタスという糸の意味のなかに、電話という意味が入っていくのです。そういう造語を見ていると、すごいなぁと思って勉強を始めたのです。言語学的にもおもしろいし、社会経済史としてもおもしろい。封建社会、しかも遊牧社会からいきなり社会主義に移行する方法というものはあるのかとか。実際やっているわけですが、矛盾もたくさんあるだろうと……。もう少し言語学もきっちりとやって社会的な面も視野に入れて勉強できるのではないかと思ったのですね。その頃、言語学は非常に構造主義的なもので、社会言語学まではいっていなかったですね。ですから、そういうものもやれるのではないかという気もあって……。

□　大学院に入られてから、言語学を本格的に勉強されたのですね。

山口

しようと思った時に、社会状況がものすごく変わってきたのです。

□　大学院に入られたのが1966年ですので、その後まもなく大学紛争ですね。

山口

この辺りから大学紛争ですね。私はこの頃には結婚していて、1967年、修士２年の時に子持ちになりました。修士論文を書かないといけないのに、妻も非常勤で高校の教師をしていましたから、大変だったですね。家庭教師とかのアルバイトをし、体力には自信がありましたが。

　そして、大学紛争に入ってきますよね。日大紛争が1968年でしたか。関西の方も盛んになってきたし、勉強どころではなかったですね。その時にこの1960年代を席巻したような思想がありますよね。松尾先生が教えておられるフランスの構造主義ですね。構造主義は、元々ソシュールなどの言語学の考え方ですね。レヴィ＝ストロースなどが言語学の記号論的な方法を使って、未開社会の親族を分析していく。要するに、西洋を相対化するということですね。いわゆる西洋の発展段階をアジアや未開社会も含めて相対的に見ていく。西洋だけが発展しているのではないという……。たぶんそういうところもあったと思うので、そういう部分で賛同するところはあったのですが、ただ、構造というものがいろいろな受け取られ方をして、結局はよくわからなかったですね。要するに、日本では構造そのものが関係性的に捉えられた。じゃ、個の主体性はいったいどうなのだという問題になったりして、そういう点で構造主義自体にものめり込むことができませんでした。今考えると1960年台というのはすごい時代でしたね。

□　そうですね。勉強できませんでした。言い訳かな……。

山口

ほんとにそういう時代でしたね。公害問題とか、いろいろな矛盾も出てくるし、大学紛争、ベトナム戦争、中国文化大革命……。錯綜していて、大学自体が滅茶苦茶荒れていましたものね。そうこうしているうちに体調をこわしてしまいました。

　ちょうど大学紛争が終わりかけて、1970年にものすごい疲れや睡眠不足から、12月に風邪をひいたのです。風邪だと思っていたら、高熱が下がらない。おかしいと思っているうちに手足がしびれてきて、それまでは歩いて近所の医者へ行けていたのですが……。結局は即入院ということに。その頃はもう歩けなくなっていました。とにかく何回も脊髄液を取られました。要するに、脊髄が炎症を起こしているということしかわからないのです。やたら白血球が多かった。それで脊髄が炎症を起こして、部分的に運動機能を麻痺させた。だから急激に筋力が衰えた。その後遺症が今も残っています。

□　入院は長かったのですか。

山口

半年ほどです。退院時は杖をついてやっと歩けるという感じでしたが、大学の非常勤の仕事があったので……。それ以後、学校関係の運がついてきて、1972年に大阪外国語大学の留学生別科に職があるからということで常勤になりました。大阪外大の留学生は全部研究留学生なのです。大阪外大で半年か１年、日本語を勉強してから希望の大学院へ行くので、みんな非常に優秀でしたね。そこで初めて日本語教育に携わることになります。

□　学生はどのくらいいたのですか。

山口

はじめは少なくて何十人でしたが、留学生政策の進展により80年代後半には100人近くいたと思います。みんなエリートですね。

□　アジアが中心ですか。

山口

いいえ、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカなど世界各国から来ていましたね。私にとっても非常に勉強になりました。今のように日本語教育の訓練を受けてから教えるということではなかったので。

□　今日本語を教える先生たちはある程度教え方の授業を受けているのですね。

山口

そうです。今は授業で日本語教授法などがありますが、その頃は全くありませんでした。先生たちもそんなことをやってきた人たちはいなかったですね。国文を出ていたり、英語をやったりで、他の言語をやっているわけですね。ここで故寺村秀夫先生をはじめ優れた先達や同僚との出会いがとても役立っています。またここで日本語と日本文化を相対的に見る目が養われたと思います。そして1975年にビルマに行ったのです。これが私にとっての一大転機になりました。

□　それじゃ、３、４年の日本語教育の経験を積まれて、それからビルマに行かれてラングーンで日本語教育をされたのですね。

山口

そうです。今はミャンマーですが、当時はビルマと言っていました。半分鎖国している状態でした。コロンボ・プランはご存知ないですか。コロンボ・プランというのは海外で援助する専門家。コロンボでそういう協定がされて日本語教育もそこに入っていたのですね。しかし、1972年に国際交流基金ができて、私の時は国際交流基金派遣の第１号なんです。前任者はコロンボ・プランで行っているのです。その前任者が女性で大阪外大の人で、ここへ行くのは山口さんしかいないと言われて……。

□　それはなぜですか。

山口

なんだかピッタリだと言われたのです。どういう意味だったのかよくわかりませんが……。その先生が自分のやったことがここで切れるのも惜しいし、山口さんは向こうの人たちとのコミュニケーションやアジアのこともやっているし、ぜひ行ってくれと言ってくださったのです。それまでは私はモンゴルをやっていて、ビルマはあまり知らなかったのです。でも、ビルマ人も大阪外大にいるうちに何人か知り合ってはいたので、まあ、行ってみようかと……。妻もビルマの日本人学校で教えられれば、いっしょに行けるからと思っていたのですが、人員の空きがなくて結局私１人で行きました。この時妻は高校の専任教員だったので、それで２年離れたのです。もっとも夏季休暇中に２回来ましたが。

□　ビルマはその時半鎖国状態だったのですか。

山口

イギリスの植民地、そして1942年から３年間の日本の軍政を経て、1948

年にビルマ連邦として独立するのですが、1962年にネウィンのクーデターによるビルマ社会主義計画党一党独裁、急激な国有化（映画館、新聞までも）がすすめられ、私の行く前年1974年に国名をビルマ連邦社会主義共和国にしました。ネウィンは大統領になり、民政移管されるも実質は軍事政権だったのです。同年に前国連事務総長であったウ・タントの遺体の埋葬をめぐり、学生・僧侶が警官と衝突、ラングーンに戒厳令が施行され、全大学、市内全中・高校を閉鎖、翌年５月まで続きました。私の到着した５月にはラングーン外国語学院は再開されませんでした。６月にはラングーン大学学生の反政府デモがあり、即大学は閉鎖されました。私の任地校の前者は９月に再開され、後者は1976年１月まで閉鎖されていました。

以上のような状況でした。

□　とても大変な状況でしたね。

山口

学生や一般の人々の不満は相当なもので、常日頃は温和で心優しい人たちであるだけに、1988年の民主化闘争のように怒りは一気に爆発するのでしょう。政府が力で抑えている構図が、スーチーさんの今もっての軟禁状態を見ても、変わっていないのが悲しいですね。

□　そのあたりのところはまた後でゆっくり聞かせてください。ところでビルマに行かれた時は、大阪外大の留学生別科の講師はいったん辞められたのですか。

山口

交流基金の派遣ということでしたので、辞めないで行けました。辞めな

くていいので給料も出るし、外地手当もあるので、身分的には非常に安定していました。

□　向こうで教えられているうちに、ビルマの言葉も勉強されたのですか。

山口

勉強しようと思ったのですが、私の勉強の仕方はどうしても文字から入ろうとするのですね。話すことから入らない。ビルマ文字はメガネ文字というかクルクルとメガネが繋がったように書いたもので、途中で挫折してしまいました。会話は学生から少し教えてもらいました。

□　授業は日本語でされていたのですか。

山口

日本語と英語ですね。かつてイギリスの植民地でしたから。ビルマ語よりも、ブロークンですが英語のほうがうまくなりました。役所などに行くとすごく面倒くさい手続きがあって、外国人なので、書類はビルマ語ではなくて全部英語だったりしましたから。

□　この時に教えられた学生たちとは今でも交流はありますか。

山口

しばらくはあったのですが、彼らはほとんど大学を卒業してから来ているのですね。仕事がないから日本語でも勉強しようかということで。だから、日本へ留学できるような人はまた別ルートなのです。ラングーン外国語学院で勉強ができる人というのは、昼間できる人は暇のある人ですね。あと朝と夜の授業もあって、そこに来る人たちはほとんど役所に

勤めていて、朝７時からの授業に仕事の前に来て、夜仕事が終わってからまた来るという感じでした。ものすごく勉強しますね。２年間ですごく上達します。

帰国してからはじめのうちは親交があって便りが来ていたりしたのですが……、もともと郵便事情も悪く、私がラングーンにいた時もすべての郵便物は大使館付けにしていました。1988年の「民主化闘争」以降、断絶した感じです。

□　それで1977年に帰って来られて、また大阪外大の留学生別科に戻られたのですね。その後、留学生の数は増えて来ましたか。

山口

1984年まではそんなに増えませんでしたが、1984年の中曽根首相の留学生10万人受け入れ計画が発表されて、それ以降大学も取り組み始めて増え始めましたね。ビルマから帰国してからも、1988年10月に立命館に来るまでずっと院生にしか教えていなかったので院生しか知らないのです。その間にはモンゴル語学科に入ってくる日本人学生にモンゴル語も教えていました。

□　その間、モンゴルに行かれたことはなかったのですか。

山口

ありませんでした。ちょうどビルマに行く頃に、モンゴルに行けるような話もあったらしいのですが、ビルマに行くことが決まってからでしたので……。もう少し早ければ、私の運命も変わっていたかもしれません。でも、私は東南アジアに行ったことは非常によかったと思います。日本の軍政の状況など恥ずかしながらそれまで無知同然であったからです。

□　1988年10月に立命館に来られる直前に大連の外国語学院に行かれていますね。

山口

そうです。大連外国語学院では赴日留学生の予備教育をしていました。日本に来る留学生は中国で試験をして合格すれば予備教育を受けて、文部省か中国政府の奨学生として日本の大学院に行ける。予備教育は、日本語教育を３月から７月まで５ヵ月間やって、８月、９月はそれぞれの専門の勉強をします。予備教育の日本語は大阪外大から、専門教育の方は京大から行きました。我々は大連、関東は東京外大から東北師範大で同様のことをやっていました。私は最後のご奉公のつもりで大連に行ったのです。立命館に来ることは決まっていましたのでね。

□　望んで行かれたということではなかったのですか。

山口

もちろん嫌々ではないです。でも、これはかなりの大役で、私の他に大阪外大から２人、国際交流基金から２人、日本語学校の人が１人、総勢６人で行きました。私が団長でかなりしんどかったですが……。大連外国語学院は中国全土から優秀な学生が集まってきているところです。

□　日本語はかなりできる学生たちですか。

山口

いや、できないクラスとできるクラスに分けました。というより日本語教育の経験の差で。できない人も４ヵ月くらいですごく上達するのです。優秀な学生を集めているからすごいのです。それまで日本語教育をして

きた中で、こんなに勉強する対象者に初めて会った感じでした。

□　優秀ということはモチベーションが高くて、一生懸命勉強するということですね。

山口

そうです。全寮制で、教室は夜10時頃まで開けています。そこで餃子パーティなどもよくやりましたが。学生達はその後日本に来て、各地の大学院で勉強していましたね。大連は東北地方、満州の入口なのですね。大連神社もあったし、よく自転車であちこちに行きました。

私はビルマから帰った後、戦前・戦中の日本語教育について少しずつ勉強し始めました。そこを押さえておかないと今の日本語教育の意味が明確にならないと思ったからです。そしてようやく1987年に「大東亜思想と日本語―かつての日本語教育と現在」という論文を書きました。日本語がいかに植民地の問題と結びつき合っていたかということを自分のためにもはっきりさせたかったのです。その頃は日本語教育の分野でそういうことをやっている人があまりいなかったこともありますが。それ以降はこの問題をずっとやっています。

□　戦争中の日本の植民地における言語政策あるいは抑圧ということですね。

山口

そうです。大連に行ったことも結果的には私の勉強にとってはすべてプラスになりました。日本語についても学生たちの質問は鋭いので勉強しましたしね。

□　それで1988年10月に立命館大学へ来られたということですね。それまでのエリート的な学生からそうではない学生に対象が移りましたが、戸惑いなどはありましたか。

山口

ありました。1986年に立命館が初めて統一特別入学試験で留学生を層として取ったのですね。少なくとも関西では私学で初めてでしたね。すごい大学があるなぁと思いました。その大学で、しかもその最初の留学生を教えるとは思わなかったですね。

実は私は立命館には1986年に非常勤講師として来ているのです。その時に初めて学部の留学生を教えました。中国とマレーシアと台湾の学生でした。その時の留学生は60人くらいでしたね。統一留学生入試が始まる以前に１人２人と来ていましたが、かれらは日本語の授業がなかったので日本人学生と同じ扱いだったのです。

留学生の数は私が来た1988年には院生を入れて177人。院生と言っても17、８人くらいしかいませんから、２年間でほぼ３倍ですね。立命館は1984年の中曽根首相の留学生10万人計画を迅速に受け入れましたね。それは、1987年に国際関係学部を作った大学の国際化の一貫ですよね。

私は立命館に来てから1994年まで留学生委員会に入っていて、副委員長も５年連続でしました。2004年には留学生の合計は院生を入れると618人になっていますね。ほぼ10倍で、あらためてこの「国際化」の進展には目をみはります。

□　日本全体で10万人は超えたのでしょうか。

山口

すでに2003年に超えています。ついでながら、2004年の留学生受け入れ

主要大学の３番目にAPUが入っています。トップは東大で2050人、２位は早稲田。立命館は24位で、短期留学生も入れているのでここでは706人になっています。私が来た時と比べると目覚ましい「国際化」になっていますよね。

□　言語文化研究所にも関わっておられましたね。

山口

私が立命館に来た翌年に国際言語文化研究所ができました。ですので、なぜか新しいところに縁があるのですね。最初の所長がドイツ語の辻先生でした。今は語学関係の先生はあまり関係していませんが、かつては語学関係の先生が中心になっていました。その研究機関として言語文化研究所ができ、教育機関として外国語教育センターができたのですね。

1995年から３年間、専任研究員でした。その時の所長が法学部から文学部に移られた英語の児玉先生で、２人とも言語専門だから結構言語問題を扱いました。多言語問題や世界の言語問題などのシンポジウムをやったりして、その時に現代の言語状況ということについてかなり勉強できました。また国民国家問題に関連してアジア問題も研究所で結構取り扱っていたので、アジア問題と言語の問題もこの３年間で勉強できましたね。言文研の専任研究員は通常１人だったのですが、ちょうどあの年だけ２人で、文化人類学の渡辺公三先生と私でやっていました。

□　立命館に赴任されてからは海外へ出かけられましたか。

山口

短期間の公務がかなりありました。1992年の１月に２週間くらい日本留学フェアというものがあって、ジャカルタ、クアラルンプール、バンコ

クへ行きましたし、1993年５月にはベトナムのハノイ工科大学へ行きました。ここと交流しようという話があって、たぶん理工学部はできていると思います。ハノイ工科大学に日本語学科を作るという話もあったのですが、うまく進まなかったようです。

1996年11月には国際交流基金からタイ、フィリピンに行って、チュラロンコーン大学とデ・ラ・サール大学で文化交流の問題で講演をしました。フィリピンでは英語だったので大変でしたが。実はこれは山本岩夫先生の教え子が国際交流基金で研修中に企画に関わられた事業で、山本先生のご紹介がありました。1997年にはAPUの開学紹介でマニラに２回行きました。2002年には半期外留で台湾へ行きました。半期ということで128日間でしたが、この時に外国で初めてじっくり勉強できた気がします。

立命館には17年半いましたが、1994年に内留を取って、2002年の台湾で終わりですね。本当は1994年に外国へ行きたかったのですが、妻が病気だったので行けませんでした。結果的には行かなくてよかったのです。妻が病気で、1995年の３月に亡くなるまでいっしょにいられましたから。いろいろな意味でタイミングがよかったのかもしれないですね。

2003年には言語教育情報学科の大学院ができて、日本語教育史を教えることになりましたから。日本語教育の歴史や植民地との関係の問題ですね。

□　台湾に行かれたのもさきほどおっしゃった戦争中の言語政策との関係ですか。抑圧の問題の研究のために行かれたのですね。

山口

そうです。台湾と朝鮮にはなぜ「国語」といういわば排除の論理で「包摂」しようとしたのか、なぜ外国語としての「日本語」教育ではなかったのか、という問題意識があります。日本語は日本精神の顕在化したも

のだから、日本語さえ教えれば日本人化できるということですね。台湾、朝鮮は少なくともそうだったのです。

国民のアイデンティティの根拠としての「国語」とコミュニケーションの道具としての「日本語」という言語の二面性から「同化」の問題を考えようとしています。日本では上田万年が明治27年に、日本語は日本人の精神的血液であるとしたことで、アイデンティティ問題はケリがついているわけですね。それ以後、日本ではアイデンティティの問題は全然問題にならない。日本の国語問題は全部国語国字問題でしょ。漢字制限とか送り仮名とか……。アイデンティティというのは日本人だったら日本語は当然という意識で、以降日本人、日本文化、日本語の三位一体から離れることはないですね。だから、外国人が日本語を話すと何かおかしいと……。明治以降「日本語」は閉じられた体系になってしまったということです。日本人であれば日本語を愛することは当然だというアイデンティティをもっていることが当然視されて、全く疑問視されていない。

台湾の知識層はむしろ言語の道具的側面を利用して、いわば「日本語」を窓口にして世界を吸収したという面もあるのです。

□　フランスには言葉を通じた独立運動が現れますよね。スペインのバスクほど過激ではありませんが、ブルターニュはケルト語系のブルトン語を通じた独立運動であるとか、コルシカ語の独立運動であるとか。程度の差はあれ、言葉を通じて自分たちの独立を意識する。しかし日本では、九州人が九州の方言を通じて独立意識をもつということはありません。

山口

関西弁でもそうですね。支配言語に対する一種アンチ言語なのですが、

関西弁を「共通語」にせよとまではいかないですね。

□　沖縄の問題も言葉を通じて興味をおもちですか。戦争中だと、本土の学者が琉球語は貴重だから残せと言いましたが、逆にそんなことをしていたら自分たちはいつまでも異邦人扱いされるじゃないかと。むしろ、自分たちは本土の言葉に同化して、沖縄の言葉を捨てたいのだと沖縄の側が反論する論争もありましたよね。

山口

そうですね。「日本復帰運動」の中心的存在であった沖縄教職員会の「共通語励行運動」があり、問題はそう単純ではないですね。単純にことばの問題に解消できないですね。また1972年のいわゆる沖縄青年同盟の「沖縄語裁判闘争」というのもあります。「被告」の「ウチナーグチ」が裁判長によって初め「日本語」とは認められず、いったんの休憩後「標準語」を使用せよと言い換えられた。

　裁判をする側は「日本語」それも「標準語」で行なうことが疑ってもみない前提になっているのですね。

　基本的にはアイヌ、沖縄の「同化」が台湾、朝鮮へとつながっていくので、どうしてもそこを見過ごすことはできません。

□　私は田中克彦の本で、大分で行われた裁判で、大分の方言でしゃべらせろと、それもわからない裁判長に何がわかるのかと主張する原告の話を読みました。

山口

『法廷に立つ言語』ですね。アイヌでもそうですね。1994年の参議院環境特別委員会での萱野茂さんのアイヌ語使用もありましたね。あれは自分

ですぐに「日本語」に翻訳されましたが……。

□　パフォーマンスでやったのですね。

山口

いろいろ考えさせられますね。また沖縄はとくに方言札という罰則がやられましたね。昭和40年代にもまだあったそうです。

□　あれはフランスが発祥とも言われていますね。

山口

こういったことを私も含めて日本語教育に携わる人間が無視できることではないと思います。国際交流が進み、お互いに外国語を勉強し合うということは視野も広がるのですごくいいことだと思うのです。

　しかし、一方では言語教育にはどうしても「同化」を迫る可能性もあります。今日本には外国人が非常に多くなってきていますね。外国人登録をしている人が総合人口の1.55％（2004年末現在）で、200万人近くになってきています。文科省が、学校教育において日本語教育が必要な外国人児童、生徒の数を最近は調査して毎年発表するのですが、公立の小、中、高等学校、養護学校で日本語の指導が必要だという子どもの数はどれくらいだと思いますか。

□　ちょっと……、考えたこともないです。

山口

そのままでは授業に入れない子どもですね。2004年は19040人で２万人に近づいています。これは文科省がそう認めている子どもで、他に不登校

の子どももいると思うので、実際はもっと多いと思います。彼らの日本語教育は、制度的に保障がされていません。日本人児童・生徒だけで手一杯の教員や非常勤の先生やボランティアに任されています。また彼らの日本語力を測る方法も確立されていません。子どもだからすぐに日常会話はできるようになる。受け答えができたら、もう日本語の授業は必要ないか、というとそうではない。日常会話だけでは教科学習についていけない。それを理解する言語能力はまた違うレベルの問題ですよね。

□　そうですね。授業で使う言語は日常で使う言語と違いますね。日常生活は言語外のコミュニケーションやいろいろな助けがあります。ところが、授業というのはわりと理論的なことをやるので、言葉をしっかり知っていないと理解できないですよね。

山口

それは言語能力の問題なのですね。言語能力そのものが育っていない。そういう意味で彼らの「母語」教育も必要なのですね。言語能力が育たないと教科学習にはついていけない。日本語は子ども同士でよくコミュニケーションがとれているからもういいということではない。この19000人に対してはそういう体制がほとんどできていないのですね。彼らの学習権はどうなるのかということです。

□　その19000人というのは全児童、生徒の割合で言うと、どれくらいなのでしょう。

山口

今ちょっと正確ではないですが、多分１パーセントもいかないでしょう。地域によってもかなり差があります。１校に何十人というところから１

校に５人未満というところもあり、全国的には集中と分散の二極化が言われています。今後これは減ることはないと思うのです。これは大問題で、「同化」でない方法、彼らのアイデンティティも認め、彼らをどのように指導していくか、とても難しい問題ですね。

□　言語、日本語をきちんとやらないと国民ではないというような……。

山口

そこが難しいです。「同化」よりむしろ「国民」でない人たちの教育をどう保障していくのか。憲法も教育基本法も「国民」に対してのみ義務教育を定めていて、外国籍の子弟には1965年の日韓法的地位協定にともなう文部省通達の希望者に入学を認め、日本人と同様に取り扱うという見解しかないのです。戦後の「在日」の経験と切れているわけではないのです。

□　最近言語教育の大学院などもありますが、むしろ、言語学をやっている人はこういう研究をやらないような気がするのですが。

山口

いわゆる言語学プロパーというのはそういうことはやらないですね。日本語教育の分野では問題になってきています。

□　むしろ、私たちのような外国語教育をやる人間が考えないといけないかなという気もしますね。

山口

日本語教育の分野でも、日本語教育史をやる人は少しずつ増えてきてい

ますがまだまだ少数ですね。日本語教育は戦後の新しい分野だと思っている人も多いですね。しかし1990年以降「国語イデオロギー」関係の研究が進展してきています。

□　民族学や社会学の分野でしょうか。

山口

むしろ「国民国家論」の問題意識からだと思います。従来の言語学、国語学に飽き足らない少数の研究者がフォローした……。田中克彦氏はかなり以前から問題提起をしていましたが（1981年『ことばと国家』など）。

□　日本語を教えるには、やはりそういう自覚はあった方がいいような気がしますが。

山口

今、海外へ教えに行く率も高いですからね。海外での日本語学習者は236万人（2003年）で、大学ではもちろんですが、オーストラリアや韓国などは中学、高校でもやっていますよ。

言語教育情報研究科の本年（2005年）の最初の修了生も海外青年協力隊などでカンボジアやモンゴル、中国に行ったりしています。今日本語教育が盛んなのは中国、韓国、東南アジアです。そうすると、そこで過去に何が行なわれたかということを知らないと困りますよね。

□　過去の反省なしに、ただ技術的に日本語を教えるだけではいけないということですね。

山口

技術的に教えても、そういう背景を理解しているかいないかではかなり違ってくると思いますね。技術と思想は本来切り離すべきではないですね。

□　相手方にそういう記憶を呼び起こすという可能性があるわけですね。先生が台湾に行かれた時には、ちょうど小林よしのりの『台湾論』が中国語に翻訳された時期だったのですか。何か感じられたことや影響はありましたか。

山口

私が行ったのは翻訳された１年後でしたが、直後はいろいろ物議をかもしたそうです。私が行ったころはそれほど目立ったことはなかったです。ただ台湾での日本語教育発祥の地にある「学務官僚遭難の碑」（1896年抗日ゲリラの襲撃を受け６人の日本人教師が犠牲になったとされる）には「台胞抗日」「殺　殺　殺」と赤ペンキで吹き付けられた痕がありました。

□　台湾の人々は、一般的には日本に対して比較的好意的だと言われますが。

山口

その辺が韓国との違いだとよく言われます。韓国もそうですが、難しいのは近代化と植民地とが結びつくわけでしょう。日本でも同じですよね。植民地を持つことと近代とがね。台湾も近代化できたのは日本のおかげだという面を強調する論調があるのですね。支配・被支配の関係を軽視あるいは無視している論ですが。

□　支配・被支配という現実の関係性を、無視することはできませんよね。

山口

植民地と近代というのは、アジアでは切り離せないものとして考えていかなければいけないですね。

□　結局支配・被支配という形で近代が作り上げられてしまった。ヨーロッパの人間と違って、例えば私たち日本人には、近代に対する反感とも恩義ともわからないような、アンビバレンスがあって、どこかで何か、ペリー以降無理矢理近代化させられたという意識があるような気がします。それがましてや、植民地という形をとった台湾の方々にすれば、当然難しい感情があるわけですよね。比較できるレベルの話ではありませんが。

山口

顔形ほぼ日本人と同じですよね。ヨーロッパだったら顔形から違いますが。同じような顔形で支配・被支配の関係が生まれるという特徴がありますね。そういう点ではそれが見えたり、見えなくしたりしたものがあるのかもしれません。だから、好意的に受け取られたなんていうことが出やすいのでしょうね。わりあい戦時中でも、一般の兵士は、戦場という異常な精神と同時に、子どもたちにきちんと接して日本語を教えたりしてもいるのですね。学徒兵もいますし、全部が全部いつも鬼みたいな人間ではないわけですね。

□　沖縄のことでも、島尾敏雄の小説を読むと、沖縄の女性と幸福な恋をしてみたいな牧歌的なことを書くけれども、歴史的な目で見てみると……。

□　あれものちにひどい夫婦状態になるあたりを、もう少し的確に解釈

したらおもしろいなと今思いましたね。

□　社会批評的に考えるべきかもしれませんね。

□　話が少し逸れましたが、山口先生が行かれたのは東南アジアですね。一言でアジアと言っても、どこまでがアジアかという問題もありますが、今後はどうですか。

山口

やはり日本との関わり合いで考えていくということからはどうしても離れられませんね。ビルマの中部地方まで学生たちといっしょに足を延ばしたことがあるんです。その頃はラングーンから50キロ以上離れる時は、必ず許可がいりました。パガンという11世紀にできた王朝があって、廃墟同然になっているのですが、丘の上から見たら無数の壊れたパゴダが残っているのです。前年の地震のせいなのですが、かつては、モンゴル人が攻めて来たというのです。その時に大陸というのは地続きなのだとつくづく思いましたね。

北とか南ということだけではなくて大陸は陸地が続いている。そういう点で日本の島国というのは違うなぁと思いましたね。1988年３月のラングーンでの学生らの大規模な反政府デモを知ったのは大連ででした。やはりなぜか地続き的な感覚でしたね。

私はモンゴルをやって、同じアジアですが、南も見て、両方見られてよかったと思います。これからも北と南の両方に視線を持ち続けたいと思います。とくに日本語教育史的には満州をもっと調べてみたいと思っています。

しかし、日本が侵略的に関わった地域にはあらためて驚かされます。こんな小さい島国で、限られている兵力だとわかっているのに満州から

東南アジアまた南洋群島まで手を広げるわけですから。恐ろしいというか人間の域を越えているというか……。

□　騎馬民族の土地を日本の農耕民族がなぜ取ろうとしたのかということはあまり話にのぼらないですけど……。
それでは最後に、立命館に来られて17年半の感想をお願いします。

山口

私は2000年に組合の委員長もやりましたが、その頃までは、立命館は活気があっていいと思っていたのですね。しかし、2000年にAPUが開学されて、あの時が立命館の転換期ではないかと思いましたね。開学式には日の丸を掲げたし……。APUは留学生が半数で、奨学金をもらわないとアジアの学生は来られませんから。その辺りから文科省や財界に対する姿勢が変わってきたように感じますね。

あまりにも国際化とか何々化ということが強力に押し進められてきて、これはわれわれにも責任があると思いますが、内実がもうひとつのような気がします。スローガン先行型で外ばかりに向いていくというのでしょうか。留学生問題も、彼らがちゃんと卒業して、立命館に来てよかったという感覚をもてば、彼らの影響力が今後の留学生確保につながるということが基本で、一度に多くの留学生を無理をして増やすよりも今いる学生をきっちり育てることが大事だと……。そういうふうにしてきたつもりなのですけれどね。今は少しそういう感覚が昔からすると薄れているかなと思います。

外国語もやはり多言語・多文化と一方ではいいながら現実には学内では一言語化していく。今の世界と同じですね。グローバリゼーションと言いますが、結局は英語化、アメリカ化ということですから。英語を道具として使うことには問題はないと思いますが、全て英語に収斂すると

いうことは少し問題があると思います。APUは日本語と英語で二言語使用（媒介語）ですが、ベトナム語やインドネシア語、タイ語などアジア言語が学習言語として提供されています。こちらにはその機会はありませんね。1994年の改革でも、学生からアジア言語の要求がたくさん出ていました。朝鮮語はできましたが、採算が合う、合わないということもありますが、アイヌ語なども数年に１回でもよいからやることが大事だと思います。使えるようになるとかそういうことではなくて……。今の言語教育は使えるという発想だけなのですね。

□　知りたいということはありますよね。見知らぬ言葉を学び、見知らぬ世界を見たいという知的欲求です。

山口

使えることだけが大事なのではなくて、それが世界を広げるのですよ。私だって、モンゴル語もビルマ語も多少やりましたが、使えるとはとても言えないです。でも、少しやったことによって、別の見方、視野が広がります。司馬遼太郎、全面的に彼を支持するのではありませんが、彼もモンゴルをやりましたよね。そのことに関して彼は周辺から見ることの目ということの大切さを語っていましたが、まったく同感です。中央というか英語の目からのみで世界を見るのではなくて、周辺から見る目がないとバランスが取れない。

□　文化の三角測量とか三点確保ですね。大学なら、たとえ採算が取れないことであっても、そういうことを許すというか、そういう懐の深さが欲しいと思いますね。

山口

同感です。

□　これからはそういうことがやれる大学が評価されるのではないかと思うんですが。

山口

立命館では大学が大きくなっていくにつれて、外国語自体は学問じゃないという発想になってきていますね。これではNOVAと同じですよね。日本語教育がそうなったらとても困ります。教える技術だけだということになれば大変なことになります。

□　それでは時間になりましたので終わらせていただきたいと思います。今日はありがとうございました。